

# 「学（ぶ）力の育成の試み」

—歴史総合と探究科目の実践報告—

横浜市立東高校

智野 豊彦

## はじめに

新課程が正式に実施される 2022 年に現勤務校に転勤となり、歴史総合を担当することになった。カリキュラムなどは一応の枠組みはあったが、評価規準・基準はあいまいで、私を含めて新しく転勤してきた 2 人と、一年前に赴任した教員、合計 3 人で新しい授業を開発していった。この発表では、歴史総合の授業と、これを土台とした日本史探究の授業の実践を報告する。

授業の目的の一つが「学力」を育成するものであることを否定するものはないであろう。しかし、求める「学力」は、様々なとらえ方がある。報告者は、これを、各自のおかれた立場や環境・状況の中で、「学ぶ力」と認識している。表題に（ぶ）を入れたのはこれが理由である。

勤務校は、一部国公立を射程にしながら、多くが私立大学に進学する「中堅公立校」である。生徒の多くは教員が配布するプリントによる分かりやすい説明をする授業を求めている。また、定期試験などで、テストに出るところを要領よく覚えることが、勉強であり、英単語や社会であれば一問一答のような用語を覚えることに精力を注いでいる。その一方、大学入試のために必要な読解力や史資料から考える学習などは軽視していると見受けられる。「学ぶ力」のためには、学ぶことそのものの楽しさや意義を理解させるとともに、探究に必要な基本的な能力である日本語の「読む」「書く」「聴く」能力を育成していくべきである。この点は、新課程の精神とも合致していると報告者はとらえている。

## 1 歴史総合（取り組みへの前提）

着任したときに評価規準や評価基準はともにあいまいであったが、使用教科書やシラバスなどは、以下のように決まっていた。

教科書『詳述歴史総合』実教出版、資料集『明解 歴史総合図説シンフォニア』帝国書院、ワークブック『詳述歴史総合 徹底整理演習ノート』実教出版を使用し、担当者共通の中間試験・期末試験を必ず行う。

赴任する前の旧課程においては、1 年次に日本史 A と世界史 A が必修で、日本史 A は明治以降から、世界史 A は第一次世界大戦からの授業を行っていた。日本史担当者からは明治以降、公民担当から市民革命・産業革命を扱うことの要請を受けたシラバスが作成され、結果的には、「近代化」「国民国家の形成」「大衆化」「グローバル化」という歴史総合で扱うべき分野は網羅することになっていた。

この必要事項を前提に、2 年次以降の探究科目の基礎とするとともに、歴史総合が最後に学ぶ歴史科目となる生徒がいることを念頭に入れる事になった。また、試験は、担当者によって差がでないように教科書から出題していくことが、担当者 3 人で合意された。

合意事項以外に報告者がこだわったことは、「問」についてである。歴史総合では、自ら疑問や課題を発見し、それについて学ぶ姿勢を重視することになっている。この点について

では、歴史を知らないもしくは興味がない生徒に自ら疑問や課題から探求させることの困難さを指摘されていた。しかし、生徒が疑問や課題を見出せるようにアシストすることを重視し、そのために工夫はできると考えた。この点については、報告者がかねてより心がけていたことであり、旧課程授業と大きな変化はない。

教科書をベースに担当者三者ともそれぞれのやり方で、授業を進めたが、基本的には従来通りの「チョーク&トーク」である。教科書は、本文だけでも65テーマあり、最低でも1時間に1テーマ以上の進捗が必須であるが、生徒が初めて学習する「世界史」分野の説明や発問などに時間をとられ、1時間に1テーマすら進まないことが生じた。やり方はそれぞれであっても、この状況は他の担当者にも共通するものであり、早急な対応策が必要となった。もう一つの問題は、勤務校の授業における生徒の受け身の状況である。教員が「咀嚼」した知識を、要領よくたくさん口に入れることをよしとする学習スタイルを生徒に植え付けている懸念が増大していった。

## 2 歴史総合 (生徒主体の授業方法)

中間試験も期末試験も教科書から出題し、またワークブックも購入させているので、自分で学習すればできるのではないかということから出発し、主体的に学ぶ力を育成することに重点をおくようにした。そのために、教科書を自分で読み込み、工夫してノートにまとめるとともに、教科書の記述を暗記するだけでなく、自分なりの不明点や疑問を持てるようにする。また、教員の講義だけを重視させないためにも、他生徒の発表を聴きながら、教科書にアンダーラインを引き、何を話しているかを集中して聞き取れるようにさせる。

具体的には、夏休み期間に、図表のように5テーマを出席番号によって割り振り、宿題として発表用紙を作成させた。そして、2学期の授業で、同じテーマの生徒でグループワークの時間を設け、発表前に整理をさせて、発表に臨ませた。発表は、テーマ別に5人を1班、計8班によって行い、一つの発表時間を約7分、質問を約3分として、タイマーセットして展開した。

発表者が欠席した班は、その発表の時間は班を

歴史総合 夏休みの課題

1学期に学んだことに加え、日本における近代化の歴史を振り返ってまとめてみましょう。  
 ① 出前簿等で、読める前目の分担を振り分けます。自分の担当部分の道徳も調べてきましょう。  
 夏休み前日の授業で担任より、担当の輪読を共有するグループワークに取り組みます。  
 自分が担当の部分を、必ず学んでもらうべく読んでください。  
 ② 調べた内容を、この用紙の表裏で、文章・表・図・イラスト・グラフなどを用いて、工夫して自由にまとめましょう。  
 夏休み最初の歴史総合の授業に必ずもってこること。(文字は丁寧に書きましょう。)

項目・教科書ページ	課題	オーソード・オーバートン	担当する人 (出前簿号)
ゆらぐ常備体誌 (p.74~75)	幕府は外国船の来航にどのような対応したのだろうか。	幕府の外交・貿易政策 (アヘン)・文化・天保の改革・学問の広がり・幕上層・アヘン戦争・幕末維新	1~8
開国 (p.76~77)	開国は日本の未来にどのような影響を与えたのか。	ペリー・日本と開国・日本と開国交渉・開国後の日本・幕府の改革・幕府の改革・幕府の改革	9~16
幕末政府と社会変動 (p.78~79)	幕府体制をめぐる外交交渉は政府にどのような影響を与えたのか。	幕府の外交 (八月十八日の政変)・幕府の外交 (八月十八日の政変)・幕府の外交 (八月十八日の政変)	17~24
新政府の成立と諸改革 (p.80~81)	明治新政府の成立の経緯を調べよう。	戊辰戦争・明治維新・明治維新・明治維新・明治維新	25~32
富強国家と文明開化 (p.82~83)	富強国家のようになり、文明開化を遂げたのか。	富強国家・富強国家・富強国家・富強国家	33~40

(3) 授業スタイル 生徒が周りの生徒に教える

① 各生徒が自分の担当部分を学習、教科書見開き1ページを一人が担当し、5テーマでワンサイクル

1ークラス 40人 40人 ÷ 5テーマ = 1班4人 × 2 (8) × 5

10班構成

A	A	A	B	B
A	A	A	B	B
C	C	C	B	B
C	C	C	B	B
D	D	D	E	E
D	D	D	E	E
E	E	E		
E	E	E		

②発表 1グループ 5テーマ

40人 ÷ 5テーマ = 8班構成

A	B
C	D
E	

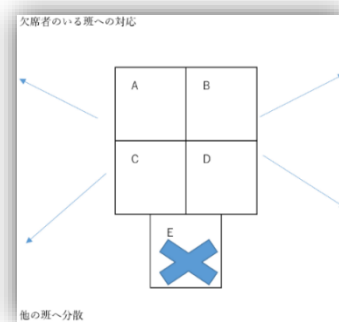
解体して、その都度他の班に分散して合流して授業を進めた。図は、(E)が欠席した場合の対応を示している。

夏休みの主題を利用した第1回の発表以後は、授業中に調べたり同じテーマの他生徒と共有したりする時間を2～3時間とり、発表に2時間とってこの授業スタイルを継続していった。

全体の前に出て発表したり、教員が説明したりしないかという質問が生徒からでた。これに対しては、次のように説明した。一つ目は、黒板の前にでて40人に発表するより、少人数の方がハードルは低いことである。クラス

全体で説明するのは、次の段階であり、報告者は後述するように翌年の日本史探究で行った。二つ目は、各生徒が発表できる機会と時間を多くとりたいことである。与えられた発表の機会を大事にいかすためにも、しっかりと材料を集め、インプットする大切さも伝えた。三つ目は、教員が説明しない点は、報告者がこだわっていることである。教員が補足したり説明したりすると、生徒は教員の説明のみを重視し、生徒同士の発表を軽視する。生徒の発表は拙く、また場合によってはミスもあるが、教員の説明のみを聴き、暗記することが試験対策の早道でそれが勉強であり授業のあるという概念は、勤務校では特に是正すべきという報告者の個人的な見解も説明した。

開始した当初の1、2か月は、調べる量が少なく時間を持て余す生徒が多かったが、回数を重ねるにつれて発表時間は長くなり、充実した内容の発表や質問についても、しっかりとしたものが増えていった。



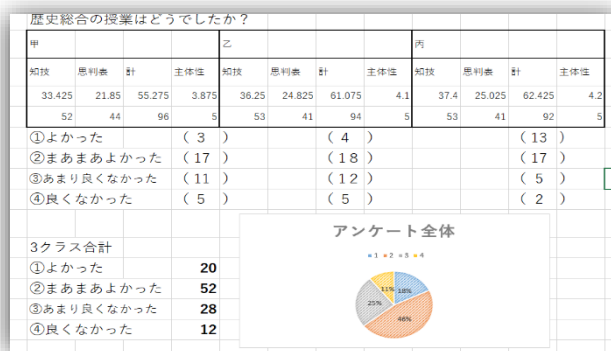
### 3 歴史総合 (生徒の反応)

教員が講義をしないことと、自学する時間が設けられているからか、一学期にはないほど多くの質問がなされた。歴史総合では、自ら疑問や課題を発見することが大切であることを理解してもらうために、途中から出てきた質問をメモし、他の生徒にも共有するように努めた。単純な用語や概念の説明を求める生徒に対して、他教員からそのような質問こそ自分たちで調べるように指導したらいいのではないかという意見がでた。長期目標として目指すべきではあるが、授業が自分たちだけで完結するスタイルであり、教員のコメントやかかわりを求めている。この点を考慮して、単純な質問にはこちら側で回答していった。一方、「なぜ大戦後に多く国が独立するのか？」などの質問にはあえて答えず、いくつかの助言を与えるだけで、自分なりに探求していくように指導した。多くの質問の中で、二つを取り上げる。

一つ目は、「イタリアは三国同盟だが、なぜ第一次世界大戦では戦勝国なのか？」という質問である。報告者は一学期の「イタリア・ドイツの統一」ですでに説明していた。これは、教員側が生徒に知識を定着できなかったこと、または、生徒が聞き逃したことなどの反省材料ではなく、自ら疑問や課題を発見していく意義の事例ととらえている。二つ目は、「開発途上国という教科書表記と発展途上国という用語は何が違うのか？」というものである。報告者には、この質問に答えられる知見がなかった。むしろ教員側が全てを知っているわけでないこと、しかし、一緒に考えたり探究したりすることはできることを示す機会とした。具体的には、教科書会社に問い合わせをさせて答えをもらった。教員側にわか

らないことがあり、調べていくということが大切であるという点は、翌年の日本史探究や政治経済でも同様に対応した。

学校評価以外でも、学年の終わりに無記名の授業アンケートをとった。2学期には、従来型の授業を行わないことに多くの生徒が不満を持ち、否定的な要望や意見ばかりであったが、「良かった」・「まあまあ良かった」という肯定的評価が2/3と多数を占めるようになっていた。また、当然ではあるが、肯定的評価が高いクラスの方が定期試験の得点が高くなっている。アンケートの記述について、それぞれコメントすべきであるが、紙面の都合により肯定的・否定的に分けて提示のみとする。



良い

普通の授業より楽しい。理解する能力・まとめる能力があがった。  
 自分で調べる大切さを知れた。  
 先生の話聞いても頭に入ってこないことでも、自分達で授業することで深く理解できた。  
 最初は教科書を写すだけだったのが、次第に重要な点をおさえテストも点がとれるようになった。  
 整理することは楽しいこととおもえるようになった。  
 自分で問題点を考え、調べるまとめて解決していくことで定着していく。  
 自分が自発的に調べる学習を行うことで理解がしやすくなる。  
 歴史に限らず様々な教科・場面で自分なりに疑問をもったり、考えをもったりできた。  
 上手にまとめる人を参考にすることもできる。  
 意見交換することで、たくさんの意見を取り入れることができた。意見がかたよらない。  
 自分で問題点を考え、調べるまとめて解決していくことで定着していく。  
 テストに関係のない話があったからよい。

悪い

自分のテーマ以外のところが分からない。  
 説明が、上手な生徒そうでない生徒がいて理解度の差がでる。格差がでる。  
 一回の発表では不十分、見聞き50分でやるところを7分でできるはずがない。  
 授業をしないのであれば先生はいらない  
 ネットの情報は間違っているかもしれないので、ある程度授業をして欲しい。  
 穴埋めなどのプリントをつくるべき。  
 単元の軽いまとめをしてほしい。  
 出来事の流れがよくわからないからこそ、学校でそれを教えて欲しい。  
 教えないならyou tubeの歴史動画を見た方がマン  
 プリントを用いた先生よる授業の方がいい。  
 発表準備が不完全な生徒がいる  
 一問一答などの知識の確認が必要。  
 先生が話す授業の方が頭に入った。  
 準備の時間が短く十分にできなかつ豆知識や余談をもらったときは頭にはいった。  
 テストにでないなら話をしないで欲しい。

#### 4 日本史探究（歴史総合から探求科目へ）

今年度は、日本史探究を担当することになった。まとめる力、調べる力、話す力、聞く力、質問する力などが伸長していることを実感してもらうよう努め、予備校やYouTubeではなく、学校の授業だからこそできる授業を展開したいと考えた。教員が教えて終わらせるのではなく、歴史総合の実践を踏まえ、できる限り生徒に調べさせたり、まとめさせたりしたものを発表させる時間を多くとるように努めた。また、歴史総合では5人での発表であったが、日本史探究では、クラス全体に発表する経験を積ませた。これは、日本史探究は、歴史総合よりも内容が詳細であり、大きな見落としや間

2学年 ホームルーム7クラス 必修選択  
 世界史探求 2クラス 担当1人  
 3年旧課程 (2クラス担当1人)  
 日本史探究 5クラス 担当3人  
 3年旧課程 (3クラス担当1人)  
 今年度は日本史探究担当 (「世界史探求」でも同様に展開する予定)  
 使用教材  
 ・『詳説 日本史』 山川出版  
 ・『新詳 日本史』 浜島書店  
 ・『詳説 日本史ノート』 山川出版

中間試験範囲 13時間 古墳文化の展開(p32)まで  
 第1サイクル (最初7班)  
 生徒7項目発表 教員1項目と「原始・古代の展望4ページ」  
 第2サイクル (6班) 生徒の事情により班編成変更  
 生徒6項目発表 教員2項目発表

期末試験範囲 13時間 律令国家の文化(p54)まで  
 第3サイクル  
 生徒6項目発表 教員発表項目なし  
 第4サイクル  
 生徒6項目発表 教員5項目発表

\*小テスト一問一答 (20問) 4回共通実施 7分

違った解釈がないかをしっかりと教員側がチェックすることも目的であった。

具体的には、クラス 26 人から 3~4 人で班をつくり、順番に発表させた。割り振れずに余った項目や休みがでた場合などを報告者が担当した。中間試験・期末試験それぞれ 2 回ずつ生徒が発表する機会を設けられた。

同一の定期試験と観点別評価基準であることは歴史総合と同様であるが、歴史総合では 3 人とも同じ授業スタイルであったが、他の教員二人は旧課程日本史 B を踏襲した従来通りの授業であることが異なる。このため、この授業スタイルそのものを検証する機会となった。報告者の担当した「甲組」であるが、中間試験の平均点は 5 クラスの中で一番低いが、期末試験では 3 番目となっている。4 回実施している単純な一問一答形式の小テストの合計が 4 位で、学習意欲が必ずしも高いとはいえず、また、2 回の定期試験は、報告者は公民を担当し、日本史探究を作成していないことを考慮すると、生徒の学力を評価してもよいと考えている。1 学期末に行った授業アンケートでは、さまざま意見や改善要望が出されたが、歴史総合の時と違い従来型の授業を望む生徒は一人だけであった。

1学期定期試験		中間テスト				期末テスト				合計		小テスト 20×4
組	点数	加	息	主	計	加	息	主	計	加	息	主
甲	平均点	48.24	21.36		69.6	27	21.62		48.62	73.38	42.15	
	最高点	64	32	0	91	34	30	0	64	96	80	0
乙	平均点	53.54	22.54		76.08	28.23	26.27		47.23	70.87	42.3	
	最高点	64	34	0	98	40	40	0	73	104	89	0
丙	平均点	53.18	22.64		73.82	28.55	25.32		53.86	81.73	47.95	
	最高点	64	32	0	96	40	38	0	78	102	67	0
丁	平均点	50.67	23.92		74.59	24.67	19.75		44.42	73.33	43.67	
	最高点	62	32	0	92	36	40	0	72	94	70	0
戊	平均点	52.08	23.1		73.18	27.67	21.16		49.13	78.64	44	
	最高点	62	32	0	94	36	32	0	66	96	64	0

準備の時間を短くして、教員の補足が欲しい。  
教科書の内容を一から自分でまとめなければいけないので、理解しづらいことや分からないところがあったので大変だった。しかし、自分が担当したところはしっかりと理解できた。  
全てを満遍なく中途半端にやるよりも、特化した部分があった方が、いづれにしても、後で自分がやることには変わりないのでよい。  
自分で調べたところがテストでできた。  
後でじっくり復習することが重要になってくる。復習するかしないかで差が出る。  
他の人の発表を一回聞いただけでも、分からない。  
自分が発表することで一杯で、分かりやすく説明することまでできない。  
生徒の発表部分は、分かりづらいが、回を重ねることで説明も上手くなっていくと思う。  
先生が前に立って授業する形態を希望する。(一人)  
生徒に配分せず教員が担当したところは、時間がないのでスピードが速く少し難しい。  
休みの人がいたり、グループで分組していてもまったりとやってこない人がいて発表できずに、負担が増える。  
発表の時、教員がズバズバ質問してくるのが怖い。どこまで調べたいのかわからない。  
グループで発表するので緊張しないです。

しかし、歴史総合のときには、直面していなかった大きな壁が表面化した。生徒の意見にもあるように、授業に来たり来なかったりする事が多い生徒と同じ班になった生徒の負担増による不満である。また、その生徒は歴史総合のときには担当していなかったが、想定以上にコミュニケーションをとることが苦手な生徒である。有効な解決策はみつからないが、その都度班替えをすることで対応していった。

それ以上に大きな課題が、時間的制約である。三単位になったとはいえ、扱う内容は詳細で分量もある。発表したことを生徒同士でまとめたり共有したりする場を確保したいが、定期試験までの時間が 13 時間ぐらいであり厳しい。さらに、生徒に調べさせ発表させると時間がかかるだけでなく、感染症拡大などによる予定外の授業減や扱う予定の範囲変更などに対応が困難なことである。2 学期は、文化祭・修学旅行に加え本年は 60 周年記念による授業カットもあり、報告者も効率と変更に対応しやすい教員主導の授業を行った。

#### 4 おわりに

新課程と新しい評価によって、従来とは違う授業開発の試みがなされている。今回の実践報告は、実際の取り組みのままであり、報告者の意図だけでなく、生徒の意見や要望も加減することなく報告している。決して成功例ではないが、従来の制約を超えた授業開発の試みとしてご理解いただきたい。また、歴史総合で生徒の意識を大きく変えた「身近なものから歴史を考える」についてもどこかで別途報告する機会があればと思っている。